

この朝与えられた聖書箇所は「ローマの信徒への手紙」5章1節以下です。本日の箇所は、使徒パウロが宣べ伝えた福音の要約であり、他の箇所がなくても、ここだけでパウロの語りたいことを言い尽くしていると言っても良い箇所です。ローマ書の中心となるテーマは「信仰による義」という教義（教え）です。これまでの1～4章で、手紙の著者であるパウロは、すべての人が神から離れ、欲望の赴くままに自己中心なほしいままの歩みをしてきたと説いています。それは、神に特別に選ばれ、聖なる掟である律法を与えられたユダヤ人といえども例外ではないというのです。しかし、信仰の父と呼ばれたアブラハムは、律法がいまだ与えられていなかった時代でも、神を信じることで義と認められたと4章に書きます。4章3節をお読みください。「聖書には何と書いてありますか。『アブラハムは神を信じた。それが彼の義と認められた』とあります」と書かれます。これは、アブラハムだけに当てはまることではない。イエス・キリストによる救いを知っている私たちも同じです。律法の戒めを守り、それを忠実にやることによって人は救われるのではない。そうではなく、ただ「信仰によって」人は神から義とされるのだとパウロは説きます。「義とされる」とは難しい言葉ですが、人間が神との正しい関係を取り戻し、神の前で良しとされ、神への感謝と喜びをもって生きることができるようになる、ということです。平たく言えば、「義とされる」とは「救われる」とほとんど同じ意味です。

聖書が説く救いとは、人間が善い行いを重ね、あるいは難行苦行をくぐり抜けることで手に入れられるようなものではありません。さらには、救われるための特別な資格も必要ありません。同じページの上の段落、4章24節のみ言葉をお読みください。「わたしたちの主イエスを死者の中から復活せられた方を信じれば、わたしたちも義と認められます」とあるとおりです。しかし、ユダヤ人たちは、この「救いは信仰によって得られる」というパウロの言葉を聞いて憤慨しました。なぜなら、アブラハムが義とされたのも、行いがあつたからだと信じていたからです。つまり、アブラハムは割礼を受けなさいという主の言葉に従って割礼を受け、その子イサクをモリヤの山でささげなさいと言われた時に、その言葉どおりイサクを本気でほふろうとした。そのような行為があつたからこそ、神はアブラハムを義と認められたのだとユダヤ人は信じていました。しかし、それは違う。アブラハムが義とされたのは割礼を受けた後ではない。割礼を受ける前に、アブラハムは既に義とされていたのではないかとパウロは言う。つまり救いが先にあって、行いはその結果として、生まれた行為だったというのです。

「人はただ神の恵みにより、無償で義とされる」とローマ書3章24節に書かれます。「無償で義とされる」、つまり「ただで」救いが与えられるのです。しかし、ユダヤ人はそのようなことを承服しませんでした。ただではいやだ、というわけです。私たち日本人もそうかもしれません。「ただほど、怖いものはない」という言葉があるとおりです。だから、人から何かを「ただで」貰うと必ずお返しをする。たとえば、葬儀のあと「香典返し」ということを大抵する。しかし、神の救いは、人間が律法の定める行為、良き業を重ねた結果、その見返しとして与えられるようなものではありません。それは神からプレゼントとして与えられるものです。このローマ書3章24節の「無償で」と訳されているもののギリシャ語は「贈り物として」という意味です。

なぜ、パウロは信仰が贈り物であり、神から与えられたものだ、ということをこれほど強く言い切ったのでしょうか。それは、人間が何かの行為をなすことで救われるとなると、人間が自分の力で救いを作り出せることになるからです。しかし、それは間違っている。人間は自分で自分を救うことはできません。救いを作り出すことが出来るお方はただ一人、神だけです。たとえば、私たちが川で溺れそうになっている時、私たちは自分で自分を引き上げることが出来るのでしょうか。あるいはまた、重い心臓病の手術が必要な時、自分で自分の手術をすることが出来るのでしょうか。それはできません。そのような時には誰かに助けてもらわなければなりません。その時、神が私たちを助けてくださると、本日の箇所でパウロは言うのです。6節をお読みください「実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった」「不信心な者」と訳される元の言葉（アセボース；**ギ**）は、「信仰などどこにもない全く不敬虔な者」という意味です。神などいない、と平然と言い切れるようなそのような人のためにキリストは死んでくださった。続く7

節の「正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために人のために命を惜しまない者ならいるかもしれせん」とは、私たちが誰のために死ぬるかということを問うています。正しい人とは、道徳的に立派な人ということです。そのような人のために死んであげようという人は滅多にいないとパウロはいう。その次の「善い人」とは「善人」というよりも、むしろ情け深い人、愛情深い人を指します。そのような人のためなら死ぬという人もいるかもしれない。しかし、キリストが来られたのはそのような正しい人、情け深い人のために死ぬというようなことで来られたのではない。そうではなく、私たちが罪人であった時に、私たちを救うためにキリストは死んでくださった。それどころか、敵であった私たちのために死んでくださったと言います。ここでパウロはかつて教会の迫害者であった自分自身のことを語っていると思われます。そのような死を死ぬことで、神は私たちに対する愛を示されたというのです。

このようなキリストの贖いの業（＝十字架の出来事）を通して、私たちの間で何が起こるのでしょうか。三つあるとパウロはいいます。第一は、神との間に平和が与えられるということです。神を知らなかったころ、私たちは恐れや不安を抱えていました。時には絶望や孤独の底に陥ることがありました。

しかし、キリストを信じる信仰により、私たちは神と和解することができた。神を信頼することができるようになったのです。それは、大きな方向転換です。もし、敵対関係のままであったらどうでしょうか。人間関係にたとえてみましょう。もしも、夫婦の間の亀裂があり、何かあるたびに喧嘩をするような関係だったらどうでしょうか。家庭に平和がなくなってしまうでしょう。これが国家同士だと戦争になります。そうすると、戦争の当事国だけでなく、国際社会にまで悪い影響が出てきます。それは、ロシアによるウクライナ侵攻がもたらした世界的な物価高を考えてみても明らかです。平和は人間がこの世で生きていくための大切な原理です。それをもたらしてくださるのは人間ではない。神さまです。私たちが神の言葉を正しく聞き、相手の立場や言い分を分かり合って、相互に受け入れ合う。時には、自分の利益を断念する必要もあるでしょう。しかし、そのような自分を捨てるわざを、キリストが十字架の上で死なれることで、私たちの先手を打つ仕方で行ってくださったのです。

第二は、神の恵みの中に入ることができるということです。私はキリスト者のいちばんの恵みは礼拝を通して神さまの祝福を頂くことだと考えています。あなたがたは幸いだ。あなたがたには、破れや欠けもあるかもしれない。しかし、わたしはあなた方を愛し、あなたがたを祝福し、どんなときにもあなたがたを支え守る、と言ってくださる方がおられる。それが、聖書の神さまです。あの徴税人のザアカイは同胞のユダヤ人から税金を取り立て、それをローマに納めていました。誇り高いユダヤ人からどれほど嫌われていたことかと思います。しかし、そのザアカイに主イエスは初めて会ったその時に「ザアカイ、今夜わたしはあなたの家に泊まることにしているよ」と声をかけられた。あなたも、神に愛されている。あなたも私の友だとおっしゃたのです。そのような神の愛の呼びかけ、祝福のことばを礼拝のたびに私たちは聞くことができるのです。

第三は、キリスト者は終わりの日にむけた希望を持てるということです。この希望のゆえに、苦難をも喜んで受け入れることができるのです。もちろん、信仰が与えられたからといって、そのあとはすべて順風満帆に進むわけではありません。試練や困難が襲い掛かります。体調を崩し、病気になることもあるでしょう。しかし、それでも私たちは神さまから豊かに頂いているのです。自分の家族や友人、自分のことを祈ってくれる牧師をはじめとする教会の仲間たち、そして最後は万事相働きて益となると約束される神さまの言葉、神の言葉があります。私自身を振り返っても、急所、急所で試練に対する逃れの道を、よくも神さまがそなえてくださった、とつくづく感じます。「練達」という熟語の「練」はいとへんですが、もともとは生糸や絹を灰汁で煮て柔らかくし、それによって糸に光沢を与えるという意味を持つ言葉だそうです。しかし、私はこれを金へんの「錬」に書き換えても良いと思います。金属を練り鍛えるといういい意味です。苦難を通して私たちが鍛えられるのです。一つ一つの苦難を自分を成長させるための神さまからの試練、テストと捉えましょう。いつまでも苦しい時が続くことはありません。謙遜になって自分を見つめ直し、神さまから力を頂いて立ち上がりましょう。キリスト者の人生は勝利の人生であります。

お祈りいたします。